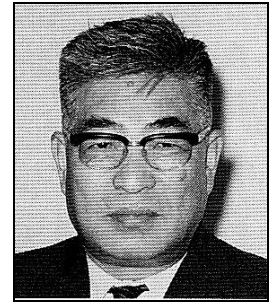


【 会員投稿 】 奥田文一さんを偲んで



1. 昭和34年4月、菱電機器(株)尾島工場の発足のため、名古屋製作所家電工場の技術部門の責任者として派遣され、小型家庭用電気器具の開発設計を担当され、当社発展の基礎を築かれた事をご承知の通りです。
特に現在の馬電の主体となっているエコ給湯機については、電気温水器の経験ある当社へ、中部電力より夜間の余剰電力を利用した温水器の開発依頼があり、落下貯湯式温水器を開発、全電力会社のルートでの販売で業界を席捲。続いて奥田さんの発案で使い勝手の良い、床置押上式温水器(現・深夜電力利用温水器の基本形)の開発、発売で深夜電力温水器のトップメーカーとなったことは、ご承知の通りです。また、温水器のみならず、胴体2分割クリーナー「風神」の開発など……。
奥田さんのお元気で活躍されて居られた時の事を思い返し、惜別の感一入であり、ご冥福をお祈り申し上げている次第です。 < 祖父江 常雄 >
2. 奥田さんには「群馬菱の実会」の発足に大変ご尽力いただいたと聞いております。
創設から22年が経ち、いまや会員も350名を超えて「菱の実会だより」や各種の活動を通じて共に働いた仲間との交流や近況を知る場として期待されている会だと確信しています。
また、奥田さんは、私が入社した時の直属の部長であり、モーターの設計を担当することになったためその先生でもありました。大きな体に厳つい顔、最初は怖そうでもとても近寄りやすい方と思いましたが、はにかみ笑いをしながらとつとつと話されるのでほっとしたのを覚えております。
「菱の実会」発足以来総会と懇親会にはよく出席くださっていたようで、8年前私が菱の実会の幹事を引き受けてからは、時々熊谷駅までお迎えに行きました。群馬製作所時代や近況の話をするのがとても楽しみな様子でした。懇親会の乾杯の音頭をお願いすると「わしゃ話が苦手だから」と大きな体をすぼめるようにして笑顔でおっしゃりながら必ず引き受けてくださいました。
3年前「90歳になったら足腰が弱ったので来年からは総会にも出られなくなるな」とおっしゃって5年分の会費を納めて「出歩けなくなっても、競馬はやれるから」といつもの笑顔でおっしゃって帰られたのがついこのあいだのように思い出されます。きっとその後も楽しい日々を過ごされたことと信じつつご冥福をお祈り申しあげます。 < 長嶺 元 >

(今後、このような故人を偲んでの記事を載せていきたいと思っておりますので、ご投稿下さるようお願いいたします)

シリーズ・【 馬電の思い出 】

あの時代…みんな一生懸命でした。忘れてならないのは、あの時代、あの体験、あの苦労があって、今があるということ。「温故知新」時々過去を振り返り、今を見直すことも必要ではないでしょうか。シリーズで、馬電の過去を振り返ってみたいと思います。1回目は、馬電の一つの転換期です。

① 昭和45年～49年 … 「情報機器への挑戦」

昭和45年は、馬電にとって一つの転換期であり、難関期でした。

主力商品の温水器、クリーナーが市況の低迷に見舞われ、大胆な体質改善が実施されました。

鎌倉製作所と姫路製作所に合わせて58名の生産応援者を派遣、これがきっかけで鎌倉製作所の担当機種であった「磁気ディスク」の生産を開始しました。

そして昭和46年からは、「オフィスコンピュータMELCOM80シリーズ」の生産が開始されました。

昭和47年に電子機器製造課が発足して、「磁気ディスク」や「磁気ヘッド」の外販や、「ガソリンスタンド用POS」も手がけました。

一方、従来の家電品も、昭和47年に業界初の「電子ジャー炊飯器」を発売してヒット商品となり、続いて「電子レンジ」が静岡製作所から移管され、馬電の新しい柱に育っていきました。

この2つの機種の導入で、売上も急上昇に転じました。

しかし、昭和49年には、「石油危機」による不況が日本を襲い、馬電も延べ12日にわたる創立以来初の帰休に追い込まれました。

社員数は、昭和45年に1637人を数えましたが、これをピークに以降減少していきました。

————— この、昭和45年から49年の難関期に、所長としてカジをとったのが、奥田文一さんでした。